ちほの
おしゃべりタイム

ことばの鮮度

オフィスPrima 代表
フリーアナウンサー
ビジネスマナー講師
透（とおる） 千保（ちほ）

東海地方の各放送局（岐阜放送/ぎふチャン、FM GIFU、東海ラジオ、メ～テレなど）で数多くの番組やニュースを担当。司会、ナレーションの他、名鉄電車、名古屋市営地下鉄など、公共交通機関のアナウンス放送に携わる。
一方、企業・大学において、ビジネスマナー、電話応対などの研修講師を務め、人財育成に取り組んでいる。

日本選手の大活躍、メダルラッシュの興奮とともに、東京2020オリンピック競技大会が幕を閉じました。どの大会でも、独特の言葉で競技を伝えたアナウンサーや解説者がいました。2004年アテネ大会の体操男子団体決勝でNHKアナウンサー刈屋富士雄さんが語った、「伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ」という名台詞を覚えている方も多いことでしょう。言葉は、その瞬間の印象を形づくり、それを永く私たちの記憶に留めます。

今大会から採用されたスケートボード競技・ストリートで、解説を務めたプロスケートボードの瀬尻（せじり） 稜（りょう）選手が言った「ゴン攻め」。積極的で攻撃的なパフォーマンスで「ガンガン攻めている」という意味なのだそうです。「半端ない」「鬼ヤバい」などの若者言葉も飛び出しました。若い選手が多いこの競技では、国を背負って戦う悲壮感ではなく、純粋にスポーツを愉しんで仲間の成功を喜び、失敗しても挑戦を称え合う姿がすがすがしく映りました。瀬尻選手の言葉は、そうした雰囲気を伝える大事な一部分であったように思います。

一方、スポーツの場面でよく使う言葉は「がんばれ」でしょうか。これは誰かを励ます言葉なのですが、その人がこれ以上努力できない極限の状態にいる時には、酷な言葉になってしまうかもしれません。

「がんばる」の語源は諸説あり、一つは「眼張（がんは）る」と書いて「目をつける」「見張る」といった意味から「一定の場所から動かない」という意味に転じたという説。もう一つは「我を張る」であり、「自分を押し通す」から「どこまでも忍耐して努力する」に転じたという説。いずれにしても、自分が主語となる言葉でした。それが他者にも使われるようになり、1936年のオリンピック・ベルリン大会でNHKの河西三省アナウンサーが「前畑ガンバレ」と声援を送ったことがきっかけで、多くの人に広がったとも言われています。

その音源を聴くと、河西アナウンサーが興奮して20回以上も「前畑ガンバレ」を叫んでいます。前回ロサンゼルス大会の雪辱を期そうとする前畑秀子選手、まだ欧米が主体であったオリンピックに挑もうとするスポーツ新興国の日本、そうした心情が混然一体となって、時差により真夜中にラジオ中継を聴いていた多くの日本人を熱狂させたと伝えられています。今では耳慣れた感じの「がんばる」という言葉も、当時は新鮮な印象をもたらす力があったのです。

言葉は時代とともに変化します。時を超えても残っている言葉には、発せられた時の強い想いが込められているのでしょう。放送番組でのインタビューなど時間が限られている際には、「がんばって」と端的に締めくくってしまうこともありがち。でも私自身、その言葉に続けて「あなたならできる」と声をかけられ勇気が出たことがあります。言葉の鮮度を大切に、想いも伝えていきたいものです。